終章

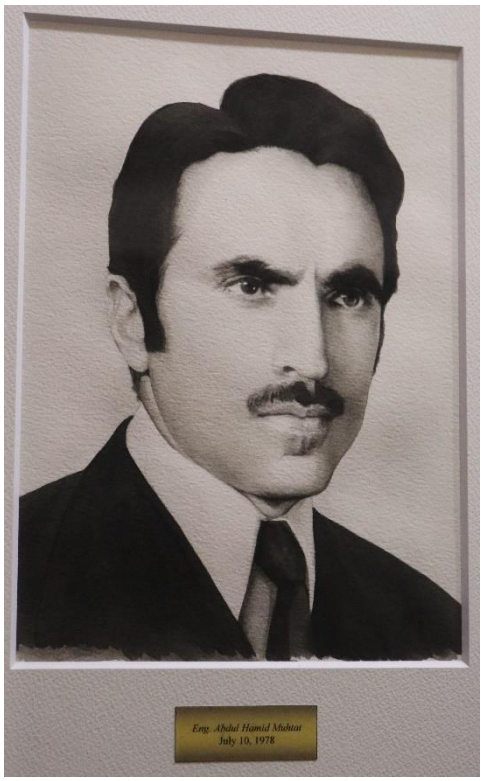
大使任命と回想

ダーウード・ハーン大統領の失脚直後、PDPA（アフガニスタン人民民主党）は国家権力の中枢における影響力を着実に強化していった。PDPA は、私が空軍において広い人脈と強い支持基盤を持っていることを認識しており、ソ連の黙認のもと、全会一致で私を日本大使に任命する決定を下した。彼らの狙いは、私を本国との連絡が容易でない国に「追放」することによって、私が支配していた空軍への影響力を完全に掌握することにあった。

ハフィズッラー・アミンの権力への執念は明白であり、私はすでにその先に待ち受ける緊張の激化を予見していた。日本への新たな赴任を強制された私は、彼らの政治的策謀を止める術を失い、祖国が自らの運命の道を進むのを見届けるしかなかった。

新政権下で初代駐日大使として私は 1978 年 6 月に東京に着任した。当初、アミンは任期を 6 か月と想定していたが、実際には私の在任期間は 9 年に及んだ。その間、私は一度もアフガニスタンの地を踏むことはなかった。

駐日アフガニスタン大使館に掲出されていた歴代大使肖像写真（駐日大使館提供）



その後の出来事は、私が予想したとおりの展開となった。ソ連の関与は助言的な立場か次第に拡大し、やがてアフガニスタンの村落や地方での実戦介入へと発展した。この戦略転換によって、３人の大統領が相次いで不名誉な形で打倒され、アフガニスタンは超大国の代理戦争の舞台へと変貌し、国家としての根幹的存在が深く損なわれることとなった。

過去からの教訓と未来への希望

アフガニスタンの歴史を振り返ると、そこには常に紛争と混乱に巻き込まれ続けた国家の姿が浮かび上がる。その主な要因として、部族間の対立、宗教的原理主義、そして外部勢力の干渉が挙げられる。アフガニスタンは歴史上、権力の平和的移

行をほとんど経験してこなかった。たとえば20世紀だけを見ても、1901年のハビーブッラー・ハーン以降の国家元首10名のうち、実に7名が暴力によって命を落とし、残る3名は亡命を余儀なくされた。この冷厳な統計と激動の歴史は、アフガニスタンが国家として安定と統治を追求するうえで、いかに大きな困難に直面してきたかを物語っている。

アフマド・シャー・ドゥッラーニによるドゥッラーニ朝の成立以降、アフガニスタンでは絶え間ない戦闘が続き、さまざまな部族勢力が互いに衝突を繰り返してきた。

大英帝国の植民地主義的野望は、アフガニスタンを従属させ傀儡政権を樹立するための3度にわたる戦争を引き起こしたが、いずれも失敗に終わった。第1次世界大戦および第2次世界大戦の時期には、アフガニスタンの地政学的重要性が一層高まり、外交政策は親独派的な姿勢と連合国側への接近との間で揺れ動いた。

第2次世界大戦後、植民地帝国の崩壊とともに、インドやパキスタン（1947年独立）など新たな独立国家が次々と誕生した。この過程で、パキスタンはアフガニスタン内政への介入を強め、地域の政治的不安定化において重要な役割を果たすこととなった。

ソ連による1979年の軍事介入と、2001年のアメリカ主導による軍事介入はいずれも「国家安全保障」を名目として正当化されたが、結果的にこの地域に永続的な安定をもたらすことはできなかった。むしろ、これら長期にわたる軍事関与は紛争と不安定をさらに長引かせ、イスラーム原理主義の台頭とターリバーンの再興を促す条件を作り出す結果となった。

今日「ターリバーン」として知られる現象は、アフガン社会の歴史的・部族的構造に深く根を下ろしている。ターリバーンは市民的権利、国際的規範、そして国連の指令をしばしば無視し、アフガニスタンを後退の道へと導いただけでなく、国際社会に対してアフガニスタンの豊かな文化的・歴史的遺産を歪んだかたちで映し出した。彼らの支配は、長い文明史の上に築かれたアフガニスタンの真の姿を、誤解と偏見の厚い層の下に覆い隠してしまったのである。

しかし、長く続く戦乱と困難の時代にもかかわらず、アフガニスタンは歴史の中で幾度か繁栄と文化的再生の時期を経験してきた。これは、外部の脅威に直面しながらも、自らの自立と文化遺産を守ろうとする国民の強い意志を示すものである。

アフガニスタンの歴史は、常に試練と逆境に直面しながらも不屈の勇気をもって立ち向かってきた国民の精神を証明する記録である。数千年にわたり、アフガニスタンはその地政

学的要衝という位置ゆえに外国勢力の侵略を受けやすく、それが民族間の対立を伴う不安定な政治構造を形成してきた。

永続的な安定を実現するためには、世界でも最も動揺の激しい地域のひとつであるアフガニスタンにおいて、何世紀にもわたり国を悩ませてきた民族問題に真摯に向き合うことが不可欠である。特定の民族の優越や支配を促す政策は、現代の民主主義社会において許されるべきではない。そのような政策を放棄し、すべての人々に社会経済的平等と市民的権利を保障することによってのみ、多様な民族間の真の統合と連帯が促進されるのである。

また、アフガニスタンだけでなく地域全体の不安定化を招いてきた主要因のひとつである宗教的原理主義は、より穏健で寛容な信仰実践へと転換されなければならない。宗派、社会集団、政党などの多様な勢力が共存できる包摂的社会を築くためには、世俗的統治の原則を堅持することが唯一の道である。

さらに、アフガニスタンの地政学的な位置ゆえに、外国からの干渉は常に国家の安定を脅かす要因であった。この現実を踏まえ、周辺諸国および主要国際アクターが真に不干渉の原則を尊重し、アフガニスタン国民が自らの手で繁栄への道を切り拓くことを可能にすることが必要である。

これらの条件が満たされて初めて、アフガニスタンは歴史的障害を克服し、本来有する潜在的可能性を実現することができるだろう。